

おおさか社会福祉史研究会

ニュースレター

2013年1月10日発行
Vol. 4

〈目次〉

研究会報告（第15回～第18回）

次回以降の研究会のお知らせ

事務局からの連絡とお願い

大阪社会福祉史研究会 会計報告

研究会報告

第15回研究報告「佐伯祐正(光徳寺善隣館)とその周辺—昭和初期から戦時下へ—」

報告者: 日本福祉大学 永岡 正己

【2011年9月30日(18:00～20:00)、場所: 石井記念愛染園 愛染橋保育園、参加者: 22名】

佐伯祐正とその活動について周辺の視点から3点をめぐって報告を行った。第1に、佐伯祐正が北市民館に勤めた時期と方面委員委嘱との関係、北市民館での志賀志那人らの影響、欧米セツルメント巡礼による思想の摂取、大阪社会事業連盟での帰国講演以後の社会事業関係者との交流を取り上げ、光徳寺善隣館設立の時期と寺院セツルメント思想の形成過程を検討し、善隣館が1921～22年の北市民館勤務時代とその後の欧米視察の後に実質的に設立され、仏教セツルメントの形態が確立する経過を述べた。

第2に、昭和恐慌期における社会事業連盟研究部会や大阪セツルメント協会での活動と社会事業、富田象吉らセツルメント関係者との交流と人脈に焦点をあて、大阪府社会事業主事であった川上貫一をはじめとする社会事業関係者の社会運動にどのように関わり、どこまで協力したかを、各自伝、川上貫一、三木正一、岩崎盈子の訊問調書や、市川嶽・照子夫妻、栈敷よし子、松本員枝、本庄茂の

各氏に報告者が過去に行ったインタビューを加えて紹介した。佐伯が経済的支援、光徳寺善隣館を通しての支援、獄中への面会、所有施設の譲渡など、運動には直接関与しないものの緩やかで人間的な支援の姿勢を特徴づけ、佐伯の位置や思想的特徴を述べた。

第3に、1938年から大毎、四天王寺、隣保事業協会を中心に計画された隣邦児童愛護会の中国児童養育事業に、佐伯が当時隣保事業協会代表としての立場で参加した経緯と、1939年1～2月の中国での選考、引率時のエピソード、帰国後の活動について、『伸び行く大陸の孤児』の他当時の新聞記事や史料を含めて紹介した。また隣邦児童愛護会の事業が、戦争協力や侵略との関係で歴史的に問われる内実をもち、当時から批判があったことを指摘するとともに、佐伯が中心の一人であったが主導的役割ではなく積極的とは言えなかったように思われることにもふれた。以上の報告を通して、佐伯祐正の活動のもつ位置と今日に受け継ぐべきものについて述べた。

第16回 研究報告(1)「ライオン歯磨「慈善券」の慈善事業助成」

報告者:大阪体育大学 山本 啓太郎

【2011年11月25日(18:00~20:30)、場所:石井記念愛染園 西成市民館、参加者:12名】

山本氏は企業の社会的貢献及び当時の慈善事業の資金繰りの視点をもとに、ライオン歯磨「慈善券」に関する研究を報告された。

現在のライオン(株)の前身である小林富次郎商店が行ったライオン歯磨の「慈善券」とは今日におけるベルマークのようなものであり、歯磨き購入者が「慈善券」を慈善事業に寄付すると、1枚あたり1厘の割合で買戻しされるしくみのものである。ライオン歯磨の売り上げが100万袋に達したことを記念して1902年10月に始まった事業であり、当時において画期的なものであった。

「慈善券」による慈善事業への寄付金は1901年度から1920年度まで20年継続された。その総額は33万6554円50銭7厘であり、年平均では17000円弱と、内務省の奨励助成の年2万円に匹敵する金額であった。年1回、配分を行った施設名を各地の新聞に掲載していた。このことに対して山本氏は、創業者である小林富次郎(1852-1910)の慈善思想の普及という意図を実践したものであり、慈善思想の普及に大きな効果をもたらしたと評価されていた。

寄付金の配分を受けた施設・団体数は20年間でのべ2256か所であり、日本国内の全道府県に加えて、当時の植民地や中国、ハワイの施設にも配分され、当時あったほぼ全分野に及ぶものであった。

1920年10月に「慈善券」は終了し、子どもの歯磨きに関する活動(「ライオン児童歯科院」)に転換がなされた。このような先駆的な「慈善券」の仕組みに続く企業は多くなかったことは、現在の日本の寄付文化の未成熟さともかかわりあうものであると考えられる。

(文責:岩本華子)

参考文献:「ライオン歯磨『慈善券』の慈善事業助成」『大阪体育大学健康福祉学部研究紀要』6,2009,43-61



慈善券付袋入(表)



慈善券付袋入(裏)

図の出典:ライオン(株)HP <http://www.lion.co.jp/ja/company/history/museum/02/>

第16回 研究報告(2)

「熊谷鉄太郎と盲人文化運動—「東亜盲人文化協会」を中心に—」

報告者:関西学院大学大学院研究員 森田 昭二

日本最初の盲人牧師として知られる熊谷鉄太郎は、盲人福祉の面でも、『英国の盲人』を通して我が国の盲人の教育や福祉の立ち遅れに警鐘を鳴らした好本督と、愛盲運動によって盲人の福祉事業の基礎を作った岩橋武夫とを繋ぐ人物として取り上げられなければならない重要な位置を占めている。

熊谷は、1916年に関西学院神学部を卒業後、大阪の市岡で牧師補助となって、伝道に入った。その頃彼は、「東亜盲人文化協会」の構想をもって盲人文化運動に着手した。この盲人文化運動については先行文献に玉田敬次の『熊谷鉄太郎—見果てぬ夢』があるが、内容は、熊谷の自伝『薄明の記憶』に従って書かれたもの

で、史的な検討が十分になされているとは言えない。そこで、「東亜盲人文化協会設立趣意書」や『日本社会事業年鑑（大正10年版）』などの資料を使って、その具体的な活動の実態と歴史的意義の解明に努めた。

欧米では進んだ盲人の教育や福祉によって盲人が文明社会にその才能を発揮し、晴眼者と肩を並べて生きているのに比べ、立ち遅れている現状から我が国の盲人を救わんとすることが「東亜盲人文化協会」の構想であった。特に乏しい福祉の面に注目した点に熊谷の識見の高さが見られる。また、東亜という視野を広げた取り組みにも従来にはない新しさがある。この視野を広げて取り組もうとする計画は、彼が日本メソジスト教会の聖職者であったことから発想されてもいる。この構想は、米国南メソジスト教会監督ランバスの援助を受けて「発起人会」

にまで進んだ。そこで討議された内容は、「内部的（対盲人界）」と「外部的（対一般社会）」とに分けて緊急に必要なとされるもの、また改善がまたれる事項であった。しかしこの計画は、ランバスの死によって資金面で挫折してしまった。

「東亜盲人文化協会」の設立活動は挫折したが、熊谷は、その後大阪の盲人たちの間に文化運動の盛り上がり呼び起こし、その中心に立つようになった。「触覚による文化見学」は全く新しい企画であり、これにつづく「全国盲人文化大会」は、参加団体90、代表者300名という大規模なもので、討議された事項は48にまで及んだ。彼が、こうした一連の盲人文化運動を推進したことは近代盲人福祉史の上で見落としてはならない重要な業績として評価してよいであろう。

第17回 研究報告「消えた」都市部落—大阪市北区下三番と舟場」

報告者：大阪市立大学人権問題研究センター特別研究員・京都大学人文科学研究所共同研究員
吉村 智博

【2012年1月27日(18:00~20:00)、場所：石井記念愛染園 愛染橋保育園、参加者：12名】

吉村氏からは淀川改良工事と、下三番（中津）、舟場のかかわりについて報告された。

1889年4月の町村制施行によって西成郡中津村が成立する。幾度もの氾濫を繰り返していた淀川の改良工事（1897年~1910年）によって、中津村の一部は舟場へ移転することとなった。中津村は1911年2月に中津町へ改称され、1925年4月には大阪市大淀区へ編入された。

淀川改良工事で移転しなかった下三番部落については1918年に編綴された『部落台帳』（大阪府救済課、1915~1917年悉皆調査）に記載されている。1912年4月には財団法人下三番青年会、1922年12月10日には下三番水平社という主体的組織が誕生している。また、下三番部落内には光徳寺第15代住職である佐伯祐正が光徳寺善隣館を1921年5月に設立している。

西成郡豊崎村は1889年4月に成立し、その後1897年4月に大阪市北区へ一部が編入された。1898年8月に上述した淀川改良工事によって豊崎村内の舟場へ中津村の一部が移転してきた。1918年に編綴された『部落台帳』や、全5編からなる『大阪府保健衛生調査報告・第2編』

（1921年）に舟場部落に関する記述がみられる。舟場部落では、1912年に「葉村青年会」として発足した、財団法人青年矯風会や、1922年5月23日に大阪府内で最初にできた水平社組織である梅田水平社、融和運動の一環として1928年に設置された大阪府公道会北支部、1937年に靴修繕業者の組織としてできた北区経済更生委員会などの主体的組織が誕生している。

生業構成をみると、下三番（中津）、舟場ともに履物直し（下駄・靴等）がそれぞれ51.0%、56.0%と多く、工場労働に就いていた割合が下三番（中津）8.4%、舟場8.4%となっていたことから、下三番（中津）や舟場は個人経営的職種の割合が高かったことが示された。

主体的組織や地域改善事業、地域社会における機能が一体化し、教育、衛生、風俗など全般的な改善事業を遂行したことによって、下層社会との連関（釜ヶ崎、長柄等）をもちつつ、社会に融即化したと吉村氏は評価している。

吉村氏の報告は様々な史料を用いて、都市部落がどのような経緯で変容をとげていったのか、都市形成過程および生活構造の究明を目指すものであり大変興味深いものであった。

（文責：岩本華子）

第18回 研究報告 公開講演会

「博愛社所蔵資料の整理・保存作業について」

報告者: 関西学院大学 室田 保夫
関西学院大学研究員 片岡 優子
関西学院大学研究員 蜂谷 俊隆

【2011年7月22日(18:00~20:00)、場所:石井記念愛染園 西成市民館、参加者:14名】

博愛社は、2010年に創立120年を迎えた日本でも有数の伝統のある社会福祉施設です。そして、明治10年代に小橋勝之助によって赤穂に創立されてから現代まで、その活動を記録した貴重な資料が保存されています。これは全国的に見ても極めて希なケースでもあります。創設者である勝之助の死後、博愛社の事業は弟の実之助と林歌子によって継続され、大阪に移転することになりますが、これらの史料は大切に保管されてきたものと推測されます。また、2011年には、新たに資料保存室が整備され、今後に向けた史料保存の取り組みにも力を入れています。

これらの史料について、2001年から関西学院大学室田研究室を中心に整理作業が開始され、2007年度からは文部科学省科学研究費補助金を受け、仮目録の作成作業や、特に貴重な資料については複製・写真撮影を行うなど、作業は飛躍的に進捗しました。また、創立者の小橋勝之助日誌については、室田保夫、鎌谷かおる、片岡優子の諸氏による翻刻作業が行われ、博愛社より『小橋勝之助日記』の小冊子として発行されました。

今回、整理され、仮目録を作成した史料の内訳は、出版された書籍(1210)、雑誌、機関紙(誌)年報、要覧など(353)、博愛社日誌および日記類(238)、博愛社および各施設業務簿冊類(583)、会計関係簿冊類(401)、その他(30)となっています(※括弧内は史料数)。この中には、博愛社の機関誌である『博愛社月報』や『博愛乃園』、博愛社と関連する施設・事業の運営に関する史料の他、小橋勝之助、林歌子、小橋実之助、小橋カツエなど博愛社関係者らの日誌や随想、備忘録などが含まれます。博愛社は、大阪の慈善事業・社会事業だけでなく、岡山孤児院の石井十次や滝乃川学園の石井亮一らとも関連が深く、これらの史料は博愛社という一施設の歴史にとどまらず、大阪はもとより、全国の社会事業の歴史を解明する上で、貴重な情報を提供してくれるものと思われます。

しかし、整理作業はまだ途上にあり、さらに整理・保存作業を進める必要があります。また、研究についても緒に就いたばかりで、今後も継続的に取り組んでいきたいと思っております。

次回以降の研究会のお知らせ

○次回の研究会の予定は以下のとおりです。

2013年1月25日(金) 午後6時～8時

テーマ：「岩橋武夫による大阪ライトハウス設立と

職業リハビリテーションの黎明としての早川分工場」

報告者：小西 律子 氏 (関西学院大学大学院人間福祉研究科博士課程後期課程)

場 所：社会福祉法人 石井記念愛染園 愛染橋保育園

大阪市浪速区日本橋東 2-9-11 TEL:06-6632-5640



○次回以降の研究会(今年度)の予定

3月22日(金)を予定しています。

講師・テーマ等の詳細は決定次第、改めてご連絡させていただきます。多くの方のご参加をお待ちしております。よろしくお祈りします。

事務局からの連絡とお願い

事務局

〒556-0006
大阪市浪速区
日本橋東
2-9-11

石井記念愛染園
愛染橋保育園内

大阪社会福祉史研究会

TEL: 06-6632-5640
FAX: 06-6632-5645
MAIL: osaka.fukusi.rekisi@gmail.com

1. 会費納入について

会費は1年間3000円となっております。

会費納入には以下の2つの方法があります。

- ①研究会に参加した際にお支払いいただく
- ②下記の口座へ振り込む

〈口座情報〉

ゆうちょ銀行

店名) 418 店番) 418

普通預金

口座番号) 0489232

口座名義) 大阪社会福祉史研究会

(オオサカシャカイフクシケンキュウカイ)

なお口座へ会費を振り込んでいただいた際には、会計担当(岩本)までご連絡ください。よろしくお祈いします。

連絡先: 岩本華子 (E-mail: iwamoto.hanako@gmail.com)

2. 参加者の募集について

本研究会では多くの方にご報告もしくはご参加いただければと考えております。大阪の歴史(分野を問いません)にご興味・ご関心のある方がおられましたら、ぜひお声掛けいただければと思います。

よろしくお祈いします。

3. 文献紹介記事の募集

ニュースレターでは大阪にかかわる歴史的な書籍や論文、施設の記念誌などの紹介を行っていきます。ぜひ原稿をお寄せください。1原稿あたり500字程度でお願いします(掲載時に編集する場合があります)。文献の入手方法等を記載いただいても結構です。よろしくお祈いします。(郵送・メール宛先: 会計担当岩本)

会計報告

2011年度の研究会の会計は
右の通りです。

〈2011年度〉 確定版

収入		支出	
前年度繰越	414,702	通信費	14,270
受取利子	99	消耗品費	970
会費(13名分)	39,000	次年度繰越	438,561
合計	453,801	合計	453,801

編集後記

※前年度繰越には特別寄付金(「機関誌発行準備金」)366,341円を含む

大変遅くなりましたが、今年度の目標の一つでした発行回数の増加を行えました。ご協力いただいたみなさまに心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。今年度は様々な視点からの研究報告をうかがう機会が多く、毎回新鮮な気持ちで学べております。多くのみなさまにご参加いただき、活発な議論ができたらしいわいです。今後ともよろしくお祈いします。(岩本華子)